

## 「姉小路式」における係助詞の捉え方

—「か」「かは」の巻を中心として—

劉 志 偉

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学  
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 本稿は「姉小路式」の一写本である『手耳葉口伝』をもとに、第五、第六の巻に当たる「か」と「かは」の巻を考察するものである。中世に入って、テニヲハ意識が一層高まり、詠歌する際に個々のテニヲハの用法を説く専門書が現れ始めた。とりわけ、それを代表するものとして「姉小路式」と呼ばれる一群の写本が挙げられる。この書には「ぞ」「こそ」「や」「か」といった係助詞に対する高い関心が認められる。本稿では「姉小路式」の著者による「か」「かは」の記述を解読した後、それを「や」や「ぞ」「こそ」の区分と比較した。その結果、「か」と「や」について、著者は両者とともに「疑ひ」の表現と認識したのみで、近世のように両者を区別する捉え方は見られなかった。また、「ぞ」「こそ」が係り結びの視点から捉えられているのに対し、「か」と「や」は疑問表現として区分されている。こうした相違について従来の研究では、「姉小路式」に先行する最初のテニヲハ秘伝書『手爾葉大概抄』の影響によるとされている。しかし、本稿で見ると、筆者は初期の連歌論書がテニヲハ論に及ぼした影響をも考え合わせなければならないと主張する。

**キーワード**：姉小路式, 手耳葉口伝, 係り結び, か, かは, や, やは, ぞ, こそ

## はじめに

「姉小路式」<sup>1)</sup>には係助詞類に対する高い関心が認められる。「ぞ」と「こそ」の巻に続いて、「や」と「か」もそれぞれ単独の巻としてたてられている。「や」と「か」は古典日本語における疑問表現<sup>2)</sup>の中心をなすもので、著者は二者を対比的に捉えつつ、「疑問」という意味・機能を軸に説明を行っている。一方、「か」の巻に続く「かは」の巻は、厳密に言えば「か」と区別される内容と見なければならないが、「姉小路式」における「かは」の記述は「か」の巻との密接な関連を示しており、本稿では敢えて「か」と「かは」の二巻をまとめて扱うこととする。そのうえ、「や」の巻の記述を考えあわせ<sup>3)</sup>、当時、著者は如何に「か」と「や」の本領を認識していたのかについて考察することとしたい。さらに、「ぞ」と「こそ」に関する記述を取り入れ、「姉小路式」

の著者はどの程度係り結びの事実を法則的に把握していたのかを明らかにしたい。

## 一、「か」の巻について

本巻において、著者は単独の「か」を最初に取り上げ、続いては複合形のもの（「か」又は「が」を伴うもの）を挙げている。この挙げ方は「や」の巻のそれと一致している<sup>4)</sup>。ここでは単独の「か」に続いて、複合形とされる「かな（がな）」と「しか（しが）」が述べられている。「か」の巻の翻刻は次の通りである。

一 かの\*ちの事\うた\*かひのかつねの\*ことしうた  
ち-ぢか-が こ-ご  
かひのやの\*ちにおな\*し\かなといへるてにはを ち-ぢ し-じ  
かといへることありうたに  
32 こゝろ\*かへする物にも「かかたこひ\*は か-が は-は

くらしきものと人にしらせん  
 33 夕月夜さすやいほりのし\*はの戸に いほりおかべい-いほりは-ば  
 さ\*ひしくもある「かひ\*くらしのこゑ ひ-び く-ぐ  
 まへのうたは心\*かへする物にもかなといゑり「の か-が  
 ちのうたはさ\*ひしくもあるかなとよめり ひ-び  
 34 あさみ\*とりいとよりかけてしらつゆを と-ど  
 たまにもぬけるはのやなき「かこれやなき  
 \しかといふてには  
 35 おもふ\*とちはるのやま\*へにうちむれて と-ど へ-べ  
 そこともいはぬたひねして「しか  
 36 ありあけの月もあかしのうらか\*せに せ-ぜ  
 なみ\*はかりこそよとみ\*え「しか は-ば え-え  
 このしかはおほかた\*過去のしのてにはなり 過去-過去  
 しをといふてにはにもかよひ侍り\又過去の  
 しの\*ちにかをやすめてしかといへるもあり ち-ぢ  
 \ねかふこゝろにもちゆる事もありよく八  
 あちはへ侍る\*へきなり へ-べ

1, **カ**の字〉著者は「疑ひのか常の如し、疑ひのやの字に同じ」との文言を以って、「か」の注釈を始めている。「か」は「や」と対比的に捉えられていることから、その指すところが「疑ひ」であることは一目瞭然である。しかし、「か」については具体例が全く挙げられていない。その結果、「か」の巻でありながらも、「か」そのものに関する記述は僅かしかない。これと対照をなす「や」の記述が詳細であったことも理由として挙げられるが、何より後述の通り、当時の人々にとって、「や」より「か」のほうがなじみ深かったことに起因しているものと思われる。「疑ひのか」の用例として次の歌が挙げられよう。

あみのうらにふなのりすらむをとめらが  
 たまものすそにしほみつらむか (万葉 40)  
 わがもこがいかにおもへかぬばたまの  
 ひとよもおらずいめにしみゆる (万葉 3647)

2, **カ** (ナ)・**ガ** (ナ)〉「かなと云へるてには」は、「かな」又は「がな」に相当する「か」のことを指すものと考えられる。以下の三首の歌が引用されている。

32 心がへする物にもが片恋は  
 苦しきものと人に知らせん (古今 540)  
 33 夕月夜さすや庵の柴の戸に

寂しくもあるか蝸の声 (新古今 269)

34 浅緑糸よりかけて白露を  
 珠にもぬける春の柳か (古今 27)

同じく以上の三首を引用したものに中院家のテニヲハ伝書『歌道秘事口伝之事』がある。その書と「姉小路式」との関係については根上剛士の論文に詳しい<sup>5)</sup>。その書には「加文字に色々あり」という項目が見られる。

夕月夜さすや岡辺の柴の戸にさびしくもある  
 かひぐらしの声  
さびしくも有哉と治定したる加文字也  
 浅緑糸よりかけて白露を  
 珠にもぬける春の柳か  
是も治定したる加也 皆哉と云詞也  
 心がへする物にもが片恋は  
 苦しきものと人に知らせん  
是は願ひたるか文字也 もかなと同前也

これを参考にすると、33・34の「か」は詠嘆の「かな」と解されうるのに対して、32の「か」は実質願望の「が」と見ることができる。ただし、願望の「が」は単独で用いられることがなく、上代では「もが」「しか」の形で表れる。そして「もがも」を経て、平安時代以降は「もがな」となり、和歌や散文を通じて日常的に用いられるようになったものと思われる<sup>6)</sup>。

一方、「かな」について第十一巻でも言及されるが、この箇所は形態上「か」とありながら、「かな」に相通ずる点で第十一巻の「かな」と区別される。こうした句末の一字の音にのみ注意を向け、形態に偏る考察視点は、テニヲハ研究書においては特徴的である<sup>7)</sup>。上述の「かな」と「もがな」の如く、個々のテニヲハを定める際に清濁を問わない<sup>8)</sup>という点も形態重視の一つの表れであると言えよう。

3, **シカ** (シガ)〉本巻の終わりに「しか (しが)」が取り上げられている。具体的にはさらに三つの場合に分けられている。

第一に、「このしかは大方過去のしのてにはなり」と述べ、二首の歌を挙げている。  
 35 思ふどち春の山辺にうち群れて  
 そことも言はぬ旅寝してしか (古今 126)  
 36 有明の月もあかしの浦風に

波ばかりこそよると見えしか（金葉 216）

「過去のし」とは過去の助動詞「き」の連体形をさすものと考えられる。しかし、実際に挙げられている証歌を確認すると、35の「しか」は自己願望を表す終助詞で、「て」または動詞の連用形につくものと理解される<sup>9)</sup>。つまり、「旅寝してしか」は「旅寝したい」という自己の願望を表している。それに対し、36の「しか」は「こそ」と呼応関係をなす「とまり」の一つで<sup>10)</sup>、一般的には過去の助動詞「き」の已然形であるとされる。そうであるとすれば、「しか」の「し」を「過去のし」とする著者の説明は奇妙にも思われるが、後述する通り、これはむしろ著者は正確に「しか」の語性を捉えたものと理解すべきである。

第二に、「又過去のしの字にかを休めてしかと云へるもあり」という。増補本系列の記述を参考にしても有力な説明は見られない。これは今日の視点からすると、釈然としない説明であると言わざるを得ない。ただし、「休め字のか」と称されている以上は、まずこれは「疑ひのか」と区別されたものと見るべきである。なぜならば、「休め」は意味解釈上の零でなければならないからである<sup>11)</sup>。軽くても「疑い」の意味合いが含まれているのであれば、厳密には「休め」とは称しえないのである。

第三に、「願ふ心に用ゆることもあり」と述べられている。具体例はなく、記述の意味するところは辿りがたい。もしこの箇所を願望の「しか」と解すれば、前述の35の歌と重なることになる。いずれにせよ、著者が願望を表す「しか（しが）」に対して高い関心を持っていることは明らかである。

## 二、「しか」の「し」は「過去のし」なのか

上で述べたように、「姉小路式」で「しか」の「し」は「過去のし」と解釈されている。そこに挙げられている証歌を参考にすると、一見的外れているようでもある。「姉小路式」を目にした<sup>12)</sup>とされる宗祇でさえ、『長六文』で「しか」について「姉小路式」と同様な証歌を挙げながらも、「過去のし」とは解釈していない。こうした

事実に鑑みると、宗祇はこの説明に対して否定的であったと言えるかもしれない。

この点については、増補本の系列の該当箇所を調べても今一つ有力な手掛かりは得られない。たとえば、『顕秘抄』では「姉小路式」の記述がほぼそのまま述べられている<sup>13)</sup>。また、『増抄』には「か」について「姉小路式」と違う説明が行われており、「しか」の「し」を「過去のし」とする記述は全く見当たらない<sup>14)</sup>。

ここで注目したいのは、なぜ『増抄』は「姉小路式」の増補本系列に属していながら、「か」について異なった説明を施したのかについてである。『増抄』の著者は有賀長伯で、歌道に精通した人物であった。彼は『顕秘抄』の著者と違い、単なる「姉小路式」の記述を踏襲するのみにとどまらず、自らのテニヲハ観を取り入れながら増補を行っていたとされている<sup>15)</sup>。この点を踏まえて考えると、『増抄』で「しか」の「し」について「過去のし」と説明されていないということは、長伯が先達の教示を無視したのではなく、彼自身のテニヲハ観に従って、それを改めたからであろう。

他方、「しか」については亨弁による『歌道秘蔵録』に次の記述が見られる<sup>16)</sup>。

此しかは大かた過去の云々 光広卿御書入のことく願かなの略也。 しの字と（は？）〔佐藤宣男氏注〕過去しにあらず。助字也。其外ニハしかは多くはこそこのうけに用てには也これによれば、亨弁も「過去のし」という説明を疑問視していることは疑う余地もない。

以上の記述をまとめると、「姉小路式」における「しか」の説明に対し、後世のテニヲハ研究書の多くは否定的であると言えよう。

しかし、後世に疑問視されたとはいえ、一概に「姉小路式」におけるこの説明は誤りとして斥けられるべきものでもない。なぜならば、今日の研究でも「しか」の「し」を過去の助動詞「き」の連体形とする説は広く支持されているからである<sup>17)</sup>。とりわけ、森田良行は「しか」について次のように述べている<sup>18)</sup>。

「もが」系統が体言や連用語などの状態性を受けるのに対し、「しか」系統は動詞や助動

詞の連用形について、その動作性（「あり」の場合は状態性）を受け、自己の行為の願望を表わす。（中略）助動詞は完了「つ」「ぬ」で、「てしかな」「にしかな」の連語を作り、それによって願望の意味を強める。（中略）きわめて積極的な願望でテンスの弱い未然形を受ける「ばや」の消極的願望とは対照的である。この点から考えても、「しか」の語源を係助詞の「し」と「か」の複合と見る説よりは、回想「き」の連体形「し」+係助詞「か」、もしくは已然形「しか」の意味の転化ととるほうが、「しか」の語性として自然であろう。

つまり、「しか」の「し」を「過去のし」とする説明は「しか」の語性からして一理はあったものと考えられるのである。

さて、「か」の巻の全体を考えあわせると、以下の二点が評価されよう。

(1) 「もがな」と「てしか」が「か」の巻で扱われているのは、森田が「もが」と「しか」を「か」の系統として論じているのと同じで、著者は「もがな」と「てしか」の語性を正しく捉えているというべきである。

(2) 「てしか」の「し」を「過去のし」とする説明は、理に適った一つの解釈であると言える。

### 三、「かは」の巻について

本巻の最初に「かはといふてには、やはといふてにはに通じ侍り」と述べられており、前巻で「か」と「や」とが対比的に捉えられていることと軌を一にする。「かは」の説明は「やは」の区分と類似した基準を有するものと考えられる。ただし、「やは」が「や」の巻の内論で論じられているのに対し、「かは」は「か」と別に単独の一卷としてたてられている。この点について、第一巻「はねてには」の記述を考え合せれば、「姉小路式」全体においてこの挙げ方は一貫したものと見るべきである。なぜならば、第一巻では句末の「らん」と呼応する「言葉」について、「らんと疑はんにはヤ・カ・カハ・ナニ・ナゾ・ナド（何の

心なり）イツ・イツク・イカニ・イカナル・イカデカ・イクタビ・ダレ・イツレ・イツコ是等の言の葉の入らずしては撥ねられ侍らぬぞ」との一文があるからである。つまり、疑問系の「言葉」として「や」「か」「かは」の三者が挙げられているのに対して、「やは」は取り上げられていない。一方、「や」の巻で「や」と「やは」は一括にされているのである。従って、「か」と「かは」は別々のテニヲハとして認識されている反面、「やは」は「や」の延長線にあるものと理解されたようである。理解しにくい基準ではあるが、記述の中では貫かれている。「かは」の翻刻を次に挙げる。

\かはといふてにはやはといふてにはにつ\*し侍り し-じ  
 37 けふのみとはるをおもはぬ\*きたにも とき-とき<sup>時イ</sup>  
 たつことやすきはなのか\*け「かは」 け-げ  
 38 あかしかたいろなき人のそ\*てをみよ か-が て-で  
 \*すゝろに月はや\*とるもの「かは」 すゝろ-すゝろと-ど<sup>こゝろならすナリ</sup>  
 \かはといふに\*もはの\*ちをはやすめてにはによむ も-もち-ぢ<sup>モ</sup>  
 事たとへは  
 39 いかならむいはほのなかにすま\*はか「は」 は-ば  
 よのうきことのきこゑこ\*さらむ さ-ざ  
 40 あふひ\*くさてるひはかみのこゝろ「か\*は」 く-ぐ は-は<sup>ハ</sup>  
 か\*けさ\*すかたにま\*つな\*ひくらん け-げ す-すつ-づ ひ-び<sup>るイ</sup>  
 \かといひてかはにもちゆる事もありやの\*ち ち-ぢ<sup>チ</sup>  
 のさたのこしやすめてにはにもちゆるか  
 41 ほとゝ\*きすけさの\*あさけになきつる\*か き-ぎ あさけ-あさけか-か●●<sup>朝明ナリ はい</sup>  
 きみきくらん「か\*あさるやすらん」 あさる-あさる<sup>アサネナリ</sup>

最初の「やはといふてにはに通じ侍り」の本質はやはり、「やは」と同様、「かは」も反語表現と「疑ひ」の表現との二つに分類されるということである。

1. 反語のカハ 証歌に 37・38 の歌が挙げられている。

37 けふのみと春を思はぬ時だにも  
 たつことやすき花のかけかは（古今 134）  
 38 明石瀉いろなき人の袖を見よ

すずろに月は宿るものかは（新古今 1558）  
最初の歌は「今日だけで終わるのだと春を思わない時でさえも立ち去り難い花の影」なのに、「まして、今日は春の終わりであるので立ち去り難いことだ」という意味で解釈される<sup>19)</sup>。続く二首目の歌は「心なしと見える海人の袖がまことあかいのは、ぬれた袖に月が映るから」だが、「月とて決してむやみに映るものではない」と訳される<sup>20)</sup>。いずれの歌でも「かは」は反語を表すものと理解されるのが一般的である。

2. 疑ひの**カハ**〈「かはといふにも、はの字を休めてには」とは、「かは」とありながら「か」のような働きをすることである。「は」文字は形の上で「か」文字と並んでいるが、「意義に変化を来さない」ものと思われる<sup>21)</sup>。「かは」に「疑ひ」の意味機能が含まれるのは、実質「か」文字によるものと見なければならぬ。「疑ひのやは」と同じ観点に立つものと言えよう<sup>22)</sup>。

39 いかならむ巖の中にすまば**か**は  
世のうきことの聞こゑ来ざらむ（古今 952）

40 あふひ草照る日は神の心**か**は  
かげさすかたにまづなびくらん（千載 146）

前者の歌ではまず「いったいどれほどの険しい岩山の中に隠れ住んでみたなら」と一旦提起を行い、「世の中のつらいことが聞こえてこないで済むものであろうか」と尋ねるのである<sup>23)</sup>。これに対し、後者の歌は「葵草を照らす日差しは神の心なのだろうか。」の如く疑問を抱いている<sup>24)</sup>。二箇所「かは」はともに「疑ひのか」と同じ働きを果たしていると解釈されうる。この点で、この箇所の「かは」は第一巻における「らんとまり」の「おさへ」とされた「かは」と同一のものと考えられる<sup>25)</sup>。

3. **ハ**が現れず、結果として反語の**ハ**となる〉歌に「か」文字のみで反語を表すものがあるとして、「かと云ひて、かはに用ひる事もあり。やの字の沙汰の如し」との補足が行われている。これは、「や」文字だけで反語に用いることがあるという説明と同じ発想であるため<sup>26)</sup>、証歌が挙げられなかったであろう。たとえば、以下の歌を挙げる事ができる。

こころなきとりにぞありけるほととぎす

ものもふとくになくべきもの**か**（万葉 3784）  
かくてのみやむべき物**か**ちはやぶる  
賀茂の社の万世を見む（後撰 1131）

4. **休メテニハに用ゆるカ**〉次の歌が引かれてい  
るだけで、内容は不明瞭である。

41 ほととぎす今朝のあさけに鳴きつるは  
君聞くらん**か**朝みやすらん（万葉 1949）

『手耳葉口伝』に挙げられている書写では、「か」を伴うものとして「鳴きつるか」と「君聞くらんか」との二つがある。しかし、「姉小路式」の諸写本を確認したところ、前者についてすべて「鳴きつる**は**」となっている<sup>27)</sup>。また、万葉集の本文も諸本「波」となっているため、前者の「か」は誤写であると思われる。よって、「休めてには」の「か」は後者の「君聞くらんか」を指すと考えるのが妥当である。しかし、この「か」について、後世の亨弁はこれに対して否定的のようである。

君きくらんか 此か文字休てにははきこえず。  
君はきくかと云疑成へし（86頁）。

亨弁は後者の「か」を「疑ひのか」と理解しているのである。「疑ひ」の意味を有すれば、休めとは理解されないということは言うまでもない<sup>28)</sup>。

「姉小路式」に先行する『大概抄』には「か」を「休めの類」とする記述がなく<sup>29)</sup>、前巻の「又過去のしの字にかを休めてしかと云へるもあり」という記述を含め、なぜか著者だけがこれほど積極的に「か」を「休めの類」として説明しようとしていた。これには、それまで「姉小路式」の著者ほど「休めの類」に高い関心を持つ人物はいなかったことが挙げられよう。「休めの類」を一巻として説かれたのがこの書を嚆矢とすることは周知の通りである。しかし、直接的には、「や」の巻の終わりに「やすめたるや」が挙げられていることに起因すると考えられる。つまり、「休めてにはに用ゆるか」は、著者が「か（かは）」と「や（やは）」とを対比的に捉えようとしたことにこだわり過ぎた結果である、と考えるべきであろう。

#### 四、「疑ひ」か「問ひ」か ——「姉小路式」の「や」と「か」——

古典日本語の疑問表現において、「か」と「や」は使い分けられていたとされる<sup>30)</sup>。とりわけ、富士谷成章による古代語の「か」と「や」の異なりを区別する説が有名である<sup>31)</sup>。

〔や〕〔か〕二つながら里言に、「カ」に当てたるに惑ふ人多し。(中略)すべて、里言に「カ」と言ふに、「思ふカ」「問ふカ」の二つあり。「思ふカ」は〔か〕に当たり、「問ふカ」は〔や〕に当たれり。たとへば人の子を、男の子か女子かと言ふは「思ふカ」なり。また、人に子はあるかなきかと言ふは「問ふカ」なり。とかく思はれて定めかねたるを思ふといふ。むげにしらぬ事をば問ふといふ。(中略)疑の挿頭を受くるに、〔か〕は上に詠みて下に読まず。〔や〕は下に詠みて上に詠まず。勢同じからねばなり。

しかし、両者の歴史的変遷を辿ってみると、成章による区分のまま全く変化がなかったとは言えない。特に、「姉小路式」が成立したとされる中世が日本語史において、最も言葉の変動が激しかった時期であることは周知の通りである。「か」と「や」についても一定の変化はあったと思われる<sup>32)</sup>。そうしてみると、「姉小路式」における「か」並びに「や」の説明が疑問表現の通史においてどのような位置にあるのかということは大変興味深い。その成立背景として、当時話し言葉と書き言葉との隔たりが広がったあまり、口伝などを通じて新たに個々の用法を示さなければならぬほどであったとされている。「姉小路式」の記述はより古い時代の用法を示したもののなか、それともその時代の使い方を指示しているのかについて研究の価値はあろう。ただし、「姉小路式」は口伝の性格を有し、記述は極めて断片的であると言わざるを得ないため、「や」と「か」が区別されていたどうかを判別することは決して容易ではない。本稿では限られた記述を通して推察することに留めたい。

前述の通り、「姉小路式」において「か」は

「や」と対比的に捉えられる中で提起されている。しかし、具体的な記述として「疑ひのか常の如し、疑ひのやの字に同じ」の一文しか見られない。そこでまず疑問表現とされる「や」に関する記述を見ると、次の三箇所が挙げられる。

(1) 疑ひのや 花や咲くらむ 霜や置くらん

(2) 疑すつるや 袖濡らせとや

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの

鳴くを聞く 八おきて行らむ (源氏物語 497)

(証歌は筆者)

(3) とやといふてには。又問ひかけてにはといゑり。

うつつにはあはぬけしきにつれなくて

みしをば夢にいひなさむとや

(俊成五社 176)

くちはててよるのころもをかはすかな

しほどけしとや哀れなりとや (俊成五社 74)

中でも(2)(3)を見ると、「とや」は「疑ひ捨つるや」と「問ひかけてには」の二つに分けられている。つまり、少なくとも「や」について「疑ひ」と「問ひ」の二通りは認識されていたということになる。

「疑ひ」に関してだけではなく、「休めたるやの字」に「休めてにはに用ゆるか」が対応していることを考えあわせると、「や」「か」に関わる個々の項目はほぼ完全に重なっている。唯一、「問ひかけてには」の「とや」に対応する「とか」がこれらの巻では見られない。ただし、「とか」に関しては「ぞ」の巻(第二巻)に次のような記述がある。

そと云ひ残すてにはあり。そかよの三つの仮名をかゝひ (筆者注:「仮名のかよひ」のことか) 侍り。とそ・とか・とよ かやうの類か。また 君かこゝろそ・君か心よ・君か心か。又云ひ捨つるそあり。下字(下知)にはあらず。この三文字は「て」と留らず。くてん。

この記述が連歌論書の「ぞかよの三字事」と深く関わっていることはさておき、「とか」は「とぞ」「とよ」と対等的に理解されていることは明白である。著者はあれほど「か」と「や」を相通ずるものとして扱ったにも拘らず、この箇所において

は「とや」に触れていない。説明に関しても具体例が挙げられておらず、「云ひ残すてには」としての「とか」が何を指しているのかについては断言できない。恐らく「とか」に続く行為を表す述語が省略されていることから、「云ひ残すてには」として扱われているのであろう。

一方、「問ひかけてには」の「とや」は格助詞の「と」によって「見る」「聞く」「思う」「言う」など具体的な行為を提示し、そして「や」によって「問ひかけ」の働きを表示するものと考えられる。行為を示す行為系の述語が歌に現れない場合、結果として「とや」が句末に用いられるようになる。そのことから、「とや」は言い切らない表現に属するものと認識されたのであろう。別言すれば、「問ひかけてには」の「とや」は「問ひ残すとや」で言い換えられても構わないのである。要するに、上述の「とか」と「とや」は実に文の構成において同じ形を取っていると理解することができる。とはいえ、著者は特に「とか」を「とや」の如く「問ひかけてには」と称していないことから、直ちに「か」も「問ひ」と認識していたとは断じ得ない。

このほか、「やは」と「かは」も、「や」と「か」の関係と同様、対比的な観点から述べられている。たとえば、「やは」は「反語のやは」「疑ひのやは」「反語のや（本質は『やは』と解されるもの）」の三つに分けられているのに対して<sup>33)</sup>、「かは」も「反語のかは」「疑ひのかは」「反語のか（本質は『かは』と解されるもの）」と三分類されている。こうした区分がなされているということは、結局著者は「か」と「や」の持つ文法機能を同一視しているということにほかならない。

しかし、もし単なる文法機能の類似により対比的な見地を示すのであれば、「か」と「や」の巻の順番を変えても差し支えないだろうと思われるが、なぜ「や」の巻は「か」の巻に先行しなければならなかったのか。つまり、「か」を先の巻として詳しく述べ、「や」については略述の形をとっても構わないはずであるが、なぜそういうふうにはならなかったのであろうか。これについて、井上誠之助は『姉小路式』以来「か」は余り重要視されず、説かれることも少なく、「か」が「や」

に属する如く考えられたところに原因があったのではなからうか」と分析している<sup>34)</sup>。しかし、これはテニヲハ研究書の記述に関する傾向の抽出に過ぎず、根本的な理由とはならない。そもそも「や」と「か」の関係は、井上のいう「かがやに属する」というのではなく、文法機能において類似性が認められ、対比的に捉えられているだけのことと考えるべきである。著者が「か」より「や」のほうを詳しく述べているのは、著者自身の言語に対する理解や認識によって論理的に支えられているのである。つまり、当時日常の口語と文語とに大きな隔たりが生じたためと思われる<sup>35)</sup>。こうした日常さほど使われない歌の表現の使い方を正しく示すため書かれたのが、「姉小路式」のようなテニヲハ研究書である。言葉の歴史の変遷を踏まえ、「姉小路式」における「か」と「や」の記述に限定していえば、「か」は「や」より当時の人々にとってなじみ深かったため、「や」のように詳しく説明する必要はなかったのではないかと考えられる。一つの根拠として、宗祇作とされる『長六文』の記述が挙げられる<sup>36)</sup>。即ち、その書に「疑ひのかをば安き事候問しるし侍らず」（37頁）という文言が確認できる。宗祇は、「姉小路式」の記述を参考にしながら、『大概抄』に注を施したと思われることから、一般的に「姉小路式」の成立時期は宗祇が生存した時代とさほど離れていないとされている<sup>37)</sup>。従って、この『長六文』の記述は「姉小路式」における言語使用の背景を反映するものと信じてよい。端的にいうと、「や」の巻に「か」の巻が続くという順番は、著者による恣意的なものではなく、言語使用の背景やその認識に基づくものと見なければならぬ。

このように「姉小路式」に「や」と「か」の区別は全く読み取れないわけではないが、基本的には著者は両者を極めて類似する表現として扱ったものと考えられる。それは、「姉小路式」が和歌作法の啓蒙書であり、日本語学史研究においては過渡的な書にすぎないことに起因する。つまり、「姉小路式」は、前述の富士谷成章による『あゆひ抄』と異なり、語学研究を目的とする著作ではないからである。

### 五、こそ・ぞの記述と比較して —— 係結びの観点から ——

「姉小路式」で「係結び」という用語は使われていないものの、係結びの事実を法則的に捉えられていたことは日本語学史において見逃せない。「姉小路式」の著者は係結びの法則的な事実を言及するにあたって「五音」を用いている。そもそも「五音」は悉曇学に由来し、中古以前までは歌語解釈の一原理として応用されていた<sup>38)</sup>。中世に入り、「五音」は和歌の文中表現と呼応する文末表現の説明に取り入れられるようになった。「五音」は『大概抄』の「通音」にも相通ずるが、「姉小路式」の著者によって「五音の第〇の音」へと発展させられた。これが直接江戸期以降の活用研究に結びつくものではないにしても、後世の活用研究を促したことは疑う余地もない事実であろう。つまり、「ぞ」「こそ」の説明で用いられている「第三の音」「第四の音」はそれぞれ現在でいう「連体形」と「已然形」と矛盾しないことから、「五音の第〇の音」は活用形研究において過渡的な役割を果たした用語と見るべきである。

「ぞ」「こそ」が「通音」や「五音」で法則的に見出されているのに対し、同じく係助詞とされる「か」「や」については同様な捉え方はなされていない<sup>39)</sup>。上で述べてきた通り、両者はともに、文脈上に顕現する具体的な意味について細かく区分が行われているのみである。しかし、著者は「か」と「や」の係助詞としての機能に全く気付かなかったわけではない。第一巻である「はねてにはの事」の冒頭には次のような記述が見られる。

らんと疑はんにはヤ・カ・カハ・ナニ・ナ  
ゾ・ナド（何の心なり）イツ・イツク・イカ  
ニ・イカナル・イカデカ・イクタビ・ダレ・  
イツレ・イツコ是等の言の葉の入らずしては  
撥ねられ侍らぬぞ

「や」と「か」はここで明らかに「らん」と呼応的に捉えられている。このような捉え方は両者に対する係助詞性についての認識の第一歩と見ることができ<sup>40)</sup>。つまり、著者は、句中に現れる「ぞ」と「こそ」はそれぞれ句末に活用語の連体

形と已然形を要求すると認識しているのに対し、同じく呼応的な視点を有する句中の「か」と「や」の場合、句末に置かれる「らん」に着目している。しかし、こうして初期のテニヲハ秘伝書でも個々の係助詞の語性について、把握の仕方などの差はあるものの、意識されていたことは否めない事実であろう<sup>41)</sup>。

では、なぜこのような差が生じてしまったのか。一面では恐らく「姉小路式」が『大概抄』の影響を強く受けたことに起因するのであろう。つまり、『大概抄』で「ぞ」「こそ」の「かかへ」が「通音」で説明されているのに対し、「や」「か」はそれぞれ「屋字有十品一也屋 二疑心 三手爾波 四願 五尤 六詞 七様 八推量 九残詞 十略屋也」「加字 有二品之別 一疑 二哉」と述べられているからである。無論、「や」「か」について、「姉小路式」の著者が『大概抄』の記述を踏襲するのみにとどまることなく、「疑ひの言葉—らん」と呼応的に捉えたことで、両書は相違を示している。一方、もう一面では連歌論書の影響も認められるのではなかろうか。というのは、早く『大概抄』に先行するとされる『連歌諸躰秘伝抄』に以下の記述が見られるからである<sup>42)</sup>。

一、みだれてには

さぞ 山里もさぞうかるらん秋のくれ  
いかなれば 身のために世はいかなればうか  
るらん

などか つらき身の老までなどか残るら  
ん

いかでか 月の夜も人はいかでかこざるら  
ん

たが 旅人はたが里までとそぐらむ

いつを 人はさていつを限りと思ふらん

たれをか とはぬ夜は誰をか友と明すらむ  
や 思はぬやうき名にたててこざる  
らん

いつまで 来ぬ人はさていつまでと待たる  
らむ

なにゝか おぼえずよ人は何にかかはるら  
む

右、一句の中にかやうのことばを入（いれ）  
候はでは、らんとはねまじく候。他准之。



即ち、連歌では付様の視点からつとに「らん」は疑問の表現と呼応的に捉えられていたということになる。「姉小路式」の著者はこのような記述に目を向けたのであろう。全体をまとめると、「姉小路式」における係助詞「ぞ」「こそ」「か」「や」に対する捉え方は上述のような両側面の要素が互いに作用し合った結果であると言えよう。

因みに「姉小路式」では今の文法範疇において係結びとされない「の」についても、係結び的に取り上げられている。これは、当時の係結び現象に対する捉え方を忠実に反映した重要な記述である。そもそも日本語学研究史において、「の」は決して「係結び」研究と無縁ではなかった。本居宣長までの長い「係結び研究」の過程を見てもわかるように、長い間「の」は「係結び」的に説かれていたものと考えられる。ただし、「姉小路式」の「の」に関する記述は『大概抄』の内容を受け継いだものであるとはいえ、著者が「の」を見抜けなかったということは時代の限界を示してもいい。それゆえ、「姉小路式」の説明はやはり過渡的なものとしか評価できない<sup>43)</sup>。が、このような過渡的な考察がなければ、近世における係結びの研究、特に本居宣長の偉大な研究もより時間を要したかもしれない。ひいては、彼の手によって飛躍的な係結び研究の発展が見られなかった可能性さえある。これが「姉小路式」が評価される理由の一つである。

## ま と め

従来の研究では係結びの事実が法則的に捉えられることについて、『大概抄』や「姉小路式」といった初期のテニヲハ秘伝書を文献的な初出とするのは一般的である。しかし、本稿で論じた通り、テニヲハ研究書に限らず、連歌論書でも係結びの事実に関心を受けていたことは否めない事実である<sup>44)</sup>。連歌論では付合の問題をはじめ、前句と後句の付様は重要視され、呼応的な観点が次第に定着するようになったと考えられる。それが和歌における文中と文末の表現同士が呼応的に捉えられることに影響を与えたのであろう。『大概抄』と「姉小路式」における「ぞ」「こそ」に関する

法則的な捉え方をはじめ、「や」「か」を含む記述も早期の連歌論書から影響が窺える。

## 注

- 1) 「姉小路式」は、最初のテニヲハ秘伝書『手爾葉大概抄』と共に中世のテニヲハ論を代表する著作の総称である。本稿では「姉小路式」の一写本である『手耳葉口伝』をもとに、巻別を持つ写本の形式を参考として、関連する内容を考察する。なお翻刻・引用にあたって、本文に施された濁点等の書入を右欄に示す。そして合点は本文に従って、「または」で表示する。また『手耳葉口伝』にあげられている証歌には通し番号を付しておいた。
- 2) 山口堯二『日本語疑問表現通史』明治書院、平成2年1月。阪倉篤義『日本語表現の流れ』（岩波セミナーブックス45）岩波書店、平成5年2月。日本語の「疑問表現」を「疑い」と「問い」とに区別しつつ、また両者を合わせて疑問表現として考えるのが一般的に行われている。
- 3) 拙稿「「姉小路式」の「や」の巻について」『日中言語研究と日本語教育』創刊号、好文社、平成20年10月、68～82頁。
- 4) 「や」についても単独の「や」と複合形の「や」とに分けられている。
- 5) 根上剛士「姉小路式の研究（一）——『歌道秘事口伝之事』との関係——」『埼玉大学紀要（人文・社会）』38-1、平成1年3月。同、「姉小路式とは何か」テニハ研究会編『テニハ秘伝の研究』勉誠出版、平成15年2月。
- 6) 森田良行「な～そ・な（禁止）・ばや・なむ・な・ね・に・が・がな・がも（希望）」（日本語における助詞の機能と解釈）『国文学解釈と鑑賞』442、昭和45年11月、110頁。
- 7) 佐藤稔「係り結びの把握 中世歌学から山田孝雄まで」『山形女子短期大学紀要』9、昭和52年3月、39頁。
- 8) 拙稿「「姉小路式」における係助詞の捉え方——「ぞ」「こそ」の巻を中心として——」『歴史文化社会論講座紀要』6、2009年3月（掲載予定）。
- 9) 小沢正夫 松田成穂『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』小学館、平成6年11月、73頁。
- 10) 「そといふ事此そのちにあまたのとまりあり五音第三の音にておさへたり（中略）一上件のほかにきしにをはねしかかくのことくとまる事あり」
- 11) 拙稿「「姉小路式」及びその周辺における「休めの類」」『日本語の研究』5-3（通巻238号）、平成21年7月、1～15頁。
- 12) 井上誠之助「解題」福井久蔵編『国語学大系——手爾波一——』白帝社、昭和39年1月、16頁。
- 13) 福井久蔵編『国語学大系——手爾波一——』白帝社、昭和39年1月、100頁。（「春樹頭秘抄」翻刻）
- 14) 福井、前掲書、131頁。（「春樹頭秘増抄」翻刻）
- 15) このような傾向は、「や」と「休め」に関する増

- 補でも認められる。
- 16) 佐藤宣男「〈翻刻〉歌道秘蔵録〈北海学園大学付属図書館北駕文庫本〉——亨弁のテニヲハ研究資料として——」『藤女子大学国文学雑誌』27, 昭和56年3月, 85頁。
  - 17) 武田祐吉「しか・てしか考」『国語と国文学』8-7, 昭和6年7月。此島正年『国語助詞の研究 助詞史の素描』桜楓社, 昭和41年3月, 389頁。
  - 18) 森田, 前掲論文, 111頁。
  - 19) 小島憲之 新井栄蔵『新日本古典文学大系5 古今和歌集』岩波書店, 平成1年2月, 55頁。
  - 20) 田中裕 赤瀬信吾『新日本古典文学大系11 新古今和歌集』岩波書店, 平成4年1月, 454頁。
  - 21) 永山勇『国語意識史の研究——上古・中古・中世——』風間書房, 昭和38年3月, 363頁。「意義に変化を来さない」は永山勇による「休め」の定義である。
  - 22) 拙稿, 前掲論文, 「姉小路式」の「や」の巻について, 74頁。
  - 23) 小島憲之 新井栄蔵『新日本古典文学大系5 古今和歌集』岩波書店, 平成1年2月, 286頁。
  - 24) 片野達郎 松野陽一『新日本古典文学大系10 千載和歌集』岩波書店, 平成5年4月, 53頁。
  - 25) 拙稿「姉小路式」における文法意識について——『手耳葉口伝』の「はねてにはの事」を中心に——『歴史文化社会論講座紀要』5, 平成20年3月。
  - 26) 「や」の巻で「あきの田のほのうへてらす稲妻のひかりのまにも我やわする(古今548)」が挙げられている。
  - 27) 福井, 前掲書, 76頁。
  - 28) 初期のテニヲハ秘伝書で「疑ひのらん」を確認することができる。「君きくらんか」は意味上「君きくらん」と同じであるとも考えられ, 「か」がなくても「疑ひ」を表せると理解されたのであろう。つまり, 「か」は音節数を合わせるため置かれた詞であると認識されたのかもしれない。ただし, 「か」に疑ひの意味を有すれば, 厳密な意味では, 「休めてには」とはならない。
  - 29) 根来司解説(国立国会図書館蔵)『手爾葉大概抄 手爾葉大概抄之抄』和泉書院, 昭和54年8月, 7頁。「加字有二品之別 一疑 二哉」
  - 30) 松尾捨治郎『国語法論攷』文学社, 昭和11年9月, 484頁。一方, 「か」と「や」の別を疑う説もある。たとえば, 松尾捨治郎がその立場を採っている。
  - 31) 中田祝夫 竹岡正夫共著『あゆひ抄新注』風間書房, 昭和35年4月, 126~127頁。
  - 32) 石井文夫「中世の疑問助詞「や」について」『未定稿』3, 未定稿の会, 昭和31年11月, 27頁。上代から中世にかけて, 文中に疑問の助詞がある場合, 「や」が「か」に侵入していき, 文末に疑問の助詞が現れる場合, その関係は逆であるという。
  - 33) 拙稿, 前掲論文, 「姉小路式」の「や」の巻について, 74頁。
  - 34) 井上誠之助「係り結び研究史稿(第一期)」『研究』26, 神戸大学, 昭和37年3月, 12頁。
  - 35) 馬淵和夫 出雲朝子『国語学史 日本人の言語研究の歴史(新装版)』笠間書院, 平成19年9月, 58頁。
  - 36) 伊地知鉄男編『連歌論集下』, 岩波文庫, 昭和31年4月。
  - 37) 井上, 前掲解題, 15~16頁。
  - 38) 永山, 前掲書, 262~270頁。亀井孝ほか『日本語の歴史4 移りゆく古代語』平凡社, 昭和39年7月。
  - 39) この傾向はかなり後世まで続いた。江戸に入り, 漸く雀部信頼著『氏邇乎波義貫鈔』に「加と上におきて下五音の第三の音にてとまる有」(福井, 前掲書, 178頁)が見られるようになった。
  - 40) 多くの疑問詞や副助詞と「らん」の呼応関係も挙げられていることから, 厳密に言えば, 「か」「や」の係助詞性について触れたとは言えないが, 一つのステップとして理解することは可能であろう。
  - 41) 「なむ」は基本的に歌で用いられないため, 言及されていない。また, 「は」「も」については近世の研究を俟たなければならないことは周知の通りである。
  - 42) 星加宗一「連歌諸躰秘伝抄」『文化』8-2, 東北帝国大学, 昭和16年2月, 131頁。木藤才蔵校注『中世の文学 連歌論集(二)』三弥井書店, 昭和57年11月, 103頁。根上剛士「連歌てにをは書と手爾葉大概抄——星加宗一論文『連歌諸躰秘伝抄』を中心として——」『東洋大学日本語研究』1, 昭和60年5月, 141頁。宗祇を祖述とする写本もあるが, 一般的に宗祇の真作とは考えられず, 『大概抄』の成立より早いとされている。
  - 43) 佐藤喜代治「係り結び」『国文学解釈と鑑賞』28-7, 昭和38年6月, 76頁。「の」は主語を示す助詞であって, 後に必ず述語が来るのは当然であるが, 述語を要求するのは実は主語であって, 主語の付属成分としての「の」ではない。つまり, 「の」は陳述の成分に関するものであり, 陳述のしかたに関するものではない。
  - 44) 『連歌諸躰秘伝抄』(宗祇の奥書を持つが, 『大概抄』に先行するとされている)では「むかひてには」「かかへてには」「さへてには」と称される内容に, 係り結び的な視点が認められる。また, 心敬作とされる『馬上集』でも「こそと有句。とまりはかならずけれと留まり侍るへき句なれ共」とある。

## **Treatment of Connective Particles in the ANEGAKOUJISHIKI : Focusing on the “KA” and “KAWA” Fascicles**

Zhiwei LIU

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, Kyoto, 606-8501 Japan

This essay is an examination of the fifth and sixth “KA” and “KAWA” fascicles of the “TENIHAK-UDEN” manuscript of the ANEGAKOUJISHIKI. On entering the Middle Ages, awareness of TENIWOHA grew, and experts on the usage of TENIWOHA constructions for reciting WAKA began to appear. The collected ANEGAKOUJISHIKI is particularly representative of this trend. This work, focuses on the connective particles “ZO”, “KOSO”, “YA”, and “KA”. In this paper, the definitions of “KA” and “KAWA” given by the author of the ANEGAKOUJISHIKI are examined, and these definitions are contrasted with those of “YA” “ZO” “KOSO”, and others. The author takes both “KA” and “YA” to be expressions of “UTAGAI” only, and the modern-day distinction is not seen. What is more, “ZO” and “KOSO” are taken as dependent connectives, as opposed to “KA” and “YA” which are classified as interrogatives. In the literature, this kind of difference is said to be due to the influence of the first esoteric TENIWOHA collection of selections from the ANEGAKOUJISHIKI : the TENIHAT-AIGAISHOU. However, it is argued in this essay that the fact that early Renga manuals were influenced by TENIWOHA thought must also be taken into account.